

「聖書に見る菜食の靈的意義」シリーズ

創造の秩序に根ざした信仰的菜食を探る

第 1 回 神の御心にかなう食のかたちとは？

神の御心にかなう食のかたちとは？

創世記の 1 章で、神は人間と動物に「種ある草と実」を食物として与えられました。そこには、命を奪うことのない、完全な調和の中で生きる世界が描かれています。

しかし、創世記 3 章で人間が墮落すると、その秩序は崩れ、やがて暴力と死が広がっていきます。神は洪水の後、ノアに対して肉食を許されましたが、それは理想からの後退であり、神の御心の譲歩として理解することができます。

本記事では、創造時の理想としての菜食、墮落による命の軽視、終末における平和な御国（イザヤ 11 章）とのつながりをたどりながら、菜食が神の創造の秩序に根ざした生き方であることを探ります。

序文—聖書に見る人間の墮落前の菜食と墮落後の肉食

現代において、健康や倫理、あるいは環境への配慮から菜食主義を選ぶ人が増えつつあります。

ですが、聖書を通してこの菜食というあり方を見直すとき、それが単なるライフスタイルにとどまらず、神の創造の秩序と深く結びついていることが分かります。

特に注目したいのは、創世記 1 章と 3 章に記された墮落前後の違い、そしてイザヤ書 11 章に描かれた将来の御国の姿です。

これらの聖句には、神が人間に望まれた本来の生き方、そして終末における回復のビジョンが、食のあり方を通して明確に示されています。

創造の秩序と菜食の原則

創世記 1 章 29～30 節には、神が人間と動物に与えられた食物として、「種のある草と実」が明記されています。

これはすなわち、神が創造された当初の世界においては、人間も動物も他の命を奪うことなく生きる存在であったことを示しています。

「わたしは全地のおもてにある種をもつすべての草と、種のある実を結ぶすべての木とをあなたがたに与える。これはあなたがたの食物となるであろう。」

— 創世記 1 章 29 節（口語訳）

このように、創造の初めにおいて神が人間に与えられた食は、完全な菜食でした。そして、この創造のすべてを神は、「はなはだ良かった」と言われたのです（創世記 1:31）。

ここに、神が望まれた調和と平和のある世界が見えてきます。

墮落による秩序の崩壊と命の喪失

しかし、創世記 3 章で人間が罪を犯し、神の戒めに背いたことによって、世界は大きく変化しました。

罪の結果、死と苦しみが人間の生活に入り込み、神は人間に「いばらとあざみ」の地を与えられます（3:18）。

さらに、神は人間に「皮の着物」を与えられました（3:21）。これは、初めて動物の命が犠牲にされた象徴的な場面と解釈されています。

この墮落以降、人間の歴史には、暴力と死、命を奪う文化が広がっていきます。そして、ついに「暴虐が地に満ちた」と描かれるようになります（創世記 6:11）。その極みとして、神は洪水をもって地を一掃されることとなります。

洪水後の譲歩としての肉食の容認

大洪水の後、神はノアとその子孫に対して、初めて肉を食物として与えることを許されます。

「すべて生きて動くものはあなたがたの食物となるであろう。さきに青草をあなたがたに与えたように、わたしはこれらのものを皆あなたがたに与える。」

— 創世記 9 章 3 節（口語訳）

この言葉には、墮落した人間に対する神の譲歩がにじんでいます。神は肉を食べることを完全に禁じるのではなく、「血を食べてはならない。血はいのちだからである」という条件のもとで肉食を許されました（創世記 9:4）。血が命の宿る座とされているのは、後のレビ記 17 章 14 節や申命記 12 章 23 節においても繰り返され、神が一貫して命の神聖さを守ろうとされたことが分かります。

それは、命の神聖さを守るための最低限の規範であり、神の本来の御心とは異なる状態であると考えられます。

終末の御国における菜食の回復

やがて、預言者イザヤは、メシアの治める平和の御国の姿を預言しました。その中で、かつて捕食者であった獣たちが、再び非暴力的な生き方を取り戻す様子が描かれています。

「乳のみ子は毒蛇の穴の上に戯れ、乳離れした子はまむしの巢に手を入れる。わが聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、また滅ぼさない。水が海をおおっているように、地はついに主を知る知識で満たされるからである。」

— イザヤ 11:8~9 (口語訳)

このような預言とともに、「ししは牛のようにわらを食い」(イザヤ 11:7)と記されています。ここには、すべての命が調和し、捕食も暴力も存在しない世界の到来が、鮮やかに描き出されています。これは、命を奪わない食生活への回帰であり、創世記における理想の回復を示すものです。

新約聖書における食の位置づけ

一方、新約聖書においては、使徒パウロが「何を食べるかによって神の国は成り立たない」(ローマ 14:17)と述べ、食物の選択が救いの条件ではないことを明言しています。また、ローマ書 14 章でパウロは食物をめぐる兄弟間の争いを論じる中で、「弱い兄弟をつまずかせない」という愛の倫理を優先させています(ローマ 14:15)。偶像に捧げた肉の問題についてはコリント人への第一の手紙 8 章でも同様の議論が展開されており、いずれにおいても食物の選択は律法的義務ではなく、愛と良心の問題として扱われています。

こうした新約の立場は、菜食を律法的義務として課するものではありません。しかし同時に、創造の秩序への応答として、また命の神聖さへの自覚として菜食

を選ぶことは、信仰的に十分な意義を持ちうると言えるでしょう。

結びに一菜食は神の秩序への応答

以上のように、創世記とイザヤ書を通して聖書を読み直すとき、菜食という生き方は、神の創造の秩序に立ち返る信仰的姿勢と理解することができます。

肉食は、人間の墮落と共に広がったものであり、神はそれを完全には喜ばれなかったと見ることもできるでしょう。

そして、やがて回復される御国においては、命を奪うことのない世界が再び実現するのです。

私たちが今日、菜食を選ぶことは、その未来の世界に向けた小さな応答の一つであり、神の御心を意識して生きる試みの一歩なのではないでしょうか。

第2回 荒廃した地と神の譲歩

荒廃した地と神の譲歩

創世記 9 章で神が肉食を許された背景には、大洪水によって荒廃した地と、生存の困難さがあつたと考えられます。植物の再生には時間がかかり、食物の確保が切実な問題となった時、神はノアに対して肉食を「青草をあなたがたに与えたように」許されました。

これは、創造の秩序を喜んで変更されたのではなく、荒廃した世界に生きる人間への憐れみと譲歩の現れでした。肉食には血を避けるという倫理的制限が課され、命の重さを忘れないよう神は配慮されました。

この記事では、菜食の原則が放棄されたのではなく、一時的に肉食が許容されたにすぎないという観点から、神の御心の一貫性を見つめ直します。

序文—肉食は臨時的な措置だったのではないか

聖書の記述を辿るとき、人間の食生活における変遷は、単なる生活習慣の変化にとどまらず、神と人との関係の変化を映し出す鏡のような役割を果たしていることに気づかされます。

特に、創世記 9 章における肉食の許可は、神の御心をめぐる深い問いを私たちに投げかけてきます。

神はなぜ、創造時には菜食のみを命じておられたにもかかわらず、洪水後に肉食を許されたのでしょうか。

その背景には、荒廃した大地と人間の弱さに対する神の憐れみが見え隠れしています。

創造の理想と墮落の現実

創世記 1 章 29 節において、神は人間に与える食物として「種のある草と実を結ぶ木の実」を明示されました。これは、他の命を奪うことなく生きる、平和と調和に満ちた世界の象徴でした。

しかし、創世記 3 章で人間が罪を犯して以降、世界は大きく変わります。いばらとあざみが地に生え、苦しみと死が人間の歴史に入り込んでいきます。

さらに地は暴虐に満ち、その結果として大洪水による全地的な審判がもたらされました（創世記 6 章 11 節）。

エデンの園における食の霊的意味

さらに、創世記 2 章においては、「命の木」と「善悪を知る木」という二本の木の存在が示されています（2:9）。神は「命の木の实」を食べることを妨げられなかった一方で、「善悪を知る木の实」については「食べてはならない」と禁じられました（2:17）。そして墮落の結果、神は人間が「命の木の实」にも手を伸ばすことを防がれ、エデンの園から追い出されます（3:22～24）。ここには、「何を食べるか」という選択が、命と死、神との関係と断絶とに直接つながるとい、聖書全体に通底する食の靈的な側面が見出されます。

大洪水と大地の荒廃

ノアの時代に起きた洪水は、人間の罪に対する神の厳粛な裁きであると同時に、地上の秩序を一度リセットする行為でもありました。

洪水によって地が一掃されたとき、植物の生態系にも深刻な影響が及んだことは想像に難くありません。現代の生態学においても、大規模な洪水の後には植生が段階的に回復する過程が必要であることが知られており、洪水直後に安定した植物性の食物を得ることは困難であったと考えられます。ノアとその家族が、命をつなぐための現実的な食料確保という問題に直面していた可能性は十分にあります。

神の譲歩としての肉食の容認

そのような文脈の中で、神はノアに対して次のように語られます。

「すべて生きて動くものはあなたがたの食物となるであろう。さきに青草をあなたがたに与えたように、わたしはこれらのものを皆あなたがたに与える。」

— 創世記 9 章 3 節（口語訳）

ここで注目すべきなのは、「青草をあなたがたに与えたように」という表現で

す。これは、以前から与えられていた植物性の食物と並列に、新たに動物性の食物を追加的に許容されたことを意味しています。

この言葉は、神が肉食を喜んで命じられたのではなく、やむを得ぬ状況下において人間に譲歩された可能性を示唆しています。植物の供給が不安定な状況で命をつなぐために、神は一定の条件のもとで肉食を容認されたのではないのでしょうか。

命を奪うことの重みと規範の設定

神はただ肉食を許可されただけではありません。同時に、人間に対して「血を避けよ」と命じられました（創世記 9 章 4 節）。

血は命そのものであり、命を奪うことの重大さを忘れてはならないという、倫理的警告が伴っています。この規定は、後のレビ記でも繰り返され、命の神聖さに対する神の一貫した姿勢が見て取れます。

神は人間に自由を与えながらも、命を軽んじることがないように戒めておられるのです。

結びに一憐れみと譲歩の中に見る神の御心

創世記 9 章の肉食の容認は、単なる食生活の自由化ではありません。それは、荒廃した世界に生きる人間に対する神の憐れみの現れであり、命を守るための譲歩として与えられたものでした。

神は、人間の弱さを知りつつも、そこに希望の道を備えてくださいました。肉食が許されたことそのものではなく、その背後にある神の御心と、人間への深い愛と忍耐を私たちは見つめ直すべきでしょう。

第3回 信仰を守る菜食という選択

信仰を守る菜食という選択

バビロンに捕らえられたダニエルと3人の友は、王の食膳から出される肉と酒を断り、野菜と水だけの食事を求めました。

これは、信仰的清さを守るための選択であり、結果として彼らは他の若者より健康で、顔色もよく、さらに神から知識と理解の祝福を受けることとなりました。

ダニエルたちの菜食は、信仰に基づいた具体的な実践であり、彼らの内なる姿勢が神に喜ばれたことを物語っています。

この記事では、ダニエル書1章の物語を通して、菜食が信仰と霊的成長を守る手段ともなり得ることを明らかにし、イザヤ書の御国のビジョンとも重ね合わせて考察します。

序文—ダニエル書に見る菜食の実践と祝福

菜食という生き方は、現代では健康や環境への配慮として語られることが多くあります。しかし、聖書の中には、それを信仰的選択として実践した者たちの具体的な記録が存在します。その最も象徴的な例のひとつが、ダニエル書1章に登場する4人の若者たちの物語です。

彼らは、異邦の王のもとに仕えながらも、神の御前に清くあろうとし、自発的に菜食を選びました。この実践が、やがて彼らに肉体的健康だけでなく、霊的・知的な祝福をもたらしたことは、今日の私たちにとっても多くの示唆を与えてくれます。

王の食膳を断る信仰

バビロンに連行されたユダヤ人の若者たちの中から、ダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤの4人が選ばれ、王の宮廷で仕えるために特別な訓練を受けることになりました。その際、彼らには王の食膳からの肉と酒が与えられましたが、ダニエルはそれを拒みます。

「ダニエルは王の食物と、王の飲む酒とをもって、自分を汚すまいと、心に思い定めたので、自分を汚させることのないように、宦官の長に求めた。」

— ダニエル1章8節（口語訳）

これは口語訳ですが、新共同訳では「ダニエルは宮廷の肉類と酒で自分を汚すまいと決心し、自分を汚すようなことはさせないでほしいと侍従長に願い出た。」となっていることから、「王の食物」とは肉類であることが分かります。

ここで注意すべきことがあります。ダニエルが野菜と水のみを求めた直接の動機は、「菜食主義」の実践そのものではなく、異教の儀式に捧げられた食物や、律法に反する肉・血を含む食物によって「自分を汚すまい」とする信仰的潔さにあったと考えられます。すなわち、ダニエルにとって菜食は目的ではなく、信仰的清さを守るための実践的な選択でした。それでも、その選択が肉体的健康と霊的祝福をもたらしたという事実は、今日の私たちに対して食と信仰の関係を深く問いかけるものです。

菜食を求めた「10日間の試み」

ダニエルは、彼らに野菜と水だけを与え、10日間その状態を試してほしいと願い出ます。

「どうぞ、しもべらを十日の間ためしてください。わたしたちにただ野菜を与えて食べさせ、水を飲ませ、そしてわたしたちの顔色と、王

の食物を食べる若者の顔色とをくらべて見て、あなたの見るところに
したがって、しもべらを扱ってください」

—ダニエル1章12~13節（口語訳）

これは、単なる健康食への提案ではなく、信仰に基づく実験的な挑戦でした。そして10日の終わり、彼らの顔色は王の食物を食べた他の若者たちよりも良く、健康であることが明らかになりました。

「十日の終りになってみると、彼らの顔色は王の食物を食べたすべての若者よりも美しく、また肉も肥え太っていた。」

—ダニエル1章15節（口語訳）

ダニエル書の著者がこの出来事を詳細に記録した意図は明らかでしょう。食の選択を通じた信仰への応答が、神の直接的な祝福と結びついているということ、後の読者に示すためです。菜食は試練を乗り越えるための偶然の方法ではなく、神の前に誠実に立ちとうとする決断に伴う実が、具体的に現れたものとして描かれているのです。

この結果を受けて、彼らは引き続き菜食を許されるようになりました（ダニエル1:16）。

神が与えた知恵と理解

さらに特筆すべきは、菜食を貫いた彼らが、知識と理解、そして霊的識別力においても抜きん出ているという点です。

「この四人の者には、神は知識を与え、すべての文学と知恵にさとい者とされた。ダニエルはまたすべての幻と夢とを理解した。」

—ダニエル1章17節（口語訳）

これは、神の戒めを守る者に与えられる報いとしての祝福であり、食を通して

神との関係を守ったことが、身体だけでなく霊性と知性にも反映された証しです。

イザヤ書 11 章との呼応

このダニエルの物語は、預言者イザヤが語る終末の平和の御国のビジョンとも深く呼応しています。

「ししは牛のようにわらを食い」

— イザヤ 11 章 7 節 (口語訳)

第 1 回で見たように、ここには命を奪うことのない世界への回帰、すなわち神の創造の秩序が回復される理想の未来が描かれています。ダニエルたちが異教の王国で菜食を貫いたことは、墮落した世界の中で、あえて御国の価値観に生きる試みであったと言えるでしょう。それは、終末的ビジョンを先取りする信仰の実践でもあったのです。

結びに—現代への問いかけ

ダニエルたちの菜食の選択は、健康的であるという理由だけでなされたものではなく、信仰的清さと神への忠実さを守るための決断でした。そしてその実践は、神からの祝福として具体的な実を結びました。

現代の私たちが何を食べ、何を選び、どのように命と向き合うかという問題は、依然として信仰と生活の交差点にある重要なテーマです。菜食という生き方が、神の秩序と調和に対する応答でありうるとするならば、ダニエルたちの姿は、今を生きる私たちへの強い問いかけであるように思われます。

総まとめ 創造の秩序に立ち返る信仰的菜食とは？

創造の秩序に立ち返る信仰的菜食とは？

本シリーズでは、旧約聖書を中心に、「菜食」が人間の健康や倫理の観点のみならず、神の創造の秩序と深く関わっているという視点から三つの記事を展開してきました。

創世記に示された理想の創造秩序、洪水後に許可された神の譲歩としての肉食、そしてダニエル書に記された信仰を守る菜食の実践。これらは互いに独立したエピソードであると同時に、神のご計画と人間の応答の関係を、食の在り方を通して語っているという点で共通しています。

本記事では、それらの内容を整理・統合しながら、まとめとして、「信仰的菜食」とは何か、そして現代に生きる私たちにどのような示唆を与えるのかを考察したいと思います。

創造の初めに示された命の調和

聖書は、天地創造の物語の中で、神が人間と動物に対して種ある草と木の実を食物として与えたと記しています（創世記 1:29-30）。これは、命を奪わずに生きるという創造本来の秩序を明示するものです。

創造主がご覧になって「はなはだ良かった」と言われた世界には、死も暴力も存在せず、すべての被造物が調和のうちに生きていました。この視点に立つとき、菜食は単なる食習慣ではなく、神の御心にかなう生活の一部であったことが見えてきます。

墮落と荒廃、そして神の譲歩

やがて人間の罪によって世界は墮落し、地は「いばらとあざみ」を生じ、命を奪う文化が入り込むようになります。最終的に神は、大洪水によってこの世を一掃されましたが、その後、ノアとその子孫に対して肉食を許されました（創世記 9:3）。

しかし、その許可は「青草のように」と表現され、本来の秩序に加えられた妥協的な措置として与えられたものでした。また、「血を食べてはならない」という戒めとともに与えられていることから、命の神聖さを損なってはならないという神の意志がうかがえます。この段階での肉食は、回復を待つ世界における一時的な措置であり、人間の弱さに対する神の憐れみの表れと理解するのが妥当です。

信仰に基づく菜食の実践とその祝福

ダニエル書 1 章に記された 4 人の若者たちは、異教的なバビロンの王宮において、王の食事を拒み、野菜と水のみで自らを養う道を選びました。これは律法に従う清さを守るためであると同時に、信仰の一貫した姿勢として自らの体を聖別する行為でもありました。

結果として、彼らは肉体的に健康であるばかりか、神からの知恵と霊的洞察をも授かり、バビロンの中枢において重要な働きを担うようになります。ここにおいて菜食は、神との関係を保つ手段であり、霊的祝福の通路となっているのです。

終末的回復の希望—イザヤ 11 章のビジョン

イザヤ書 11 章では、メシアの支配する未来の御国において、すべての生き物が再び平和のうちに生きる光景が描かれています。

「ししは牛のようにわらを食い。」

—イザヤ 11 章 7 節（口語訳）

これは、創世記における秩序の回復と対応しており、命を奪わずに生きる世界が再び訪れるという神の約束でもあります。ここにおいても、菜食は平和と調和の象徴として位置づけられています。

キリストの贖いと被造物の回復

旧約聖書における菜食の証言は、イエス・キリストの到来によって廃棄されたのではなく、より深い文脈の中に置き直されます。キリストは「律法を廃するために来たのではなく、完成するために来た」と言われ（マタイ 5:17）、被造物の回復は神のご計画の中に依然として含まれています（ローマ 8:21）。ダニエルたちが御国の価値観を先取りして生きたように、今日のキリスト者もまた、命の尊さと神の創造の秩序への応答として、食の在り方を問い直す一歩を踏み出すことができます。

結論—信仰的菜食は神の秩序に応える生き方

これまで見てきたように、菜食は単に体に良いとか、環境にやさしいといった理由にとどまるものではありません。それは、神の創造の秩序に立ち返り、命の尊さを重んじ、清くあろうとする信仰的な姿勢の表れであると言えます。

墮落したこの世の中においても、神の御国を先取りするような生き方を選ぶこと。それは、食という日常的な行為の中にあっても可能なのです。

たとえすべての人が同じ道を歩むことはないとしても、ダニエルたちのように、自分の信仰を貫く一歩としての菜食は、現代を生きる私たちにも、大きな意味を持つのではないのでしょうか。